会員研究

奈良西大寺（興正菩薩叡尊編）

粟　光　行

「恵美押勝の乱」と吉備真備

称徳天皇（重祚前も称徳天皇で表示する）は「恵美押勝の乱」の勃発に際し「金銅四天王を祀る寺院の建立」を宣言、乱の鎮圧に成功した。

「恵美押勝の乱」の勝利は四天王の絶大なる支援によると称徳天皇は思ったが、この鮮やかな勝利には四天王の加護だけで勝利したとは考えられない。

私は、藤原仲麻呂（恵美押勝）が称徳天皇に相談もなく諸国の兵士の動員する企てを知った時、女帝の頭に母親光明皇太后が信仰する聖徳太子と、女帝の師である吉備真備の2人の名が浮かんだと思う。

当時は寺院の本尊は釈迦や薬師等の如来か、弥勒や観音等の菩薩であって、仏法を護る諸天を祀る寺院は聖徳太子の四天王寺を除けば稀であった。

聖徳太子は仏教を巡って蘇我・物部氏の戦いに於いて四天王像を刻み勝利を得た。女帝もこれに倣い仲麻呂との戦いに勝利するため四天王の像を祀る寺を建立しようと思ったのであろう。

もう一人の吉備真備はあらゆる学問に通じ特に兵術と陰陽学に秀でていて、女帝がまだ阿倍内親王の時代の師であった。この「恵美押勝の乱」鎮圧の作戦立案したのは吉備真備である。

「続日本紀」は宝亀元（770）年10月、及び宝亀6年9月の項に吉備真備について詳細の記述がある。

真備は霊亀2（716）年22歳で入唐し、天平5（733）年に帰朝、聖武天皇・皇后の信任を得て、阿倍内親王の師となり、遣唐僧であった玄昉と権勢を誇ったが「広嗣の乱」で玄昉が失脚、真備も筑前・肥後守に左遷、その後遣唐使の副使となり、帰国後正4位下を授けられ太宰大弐に。

天平宝字7（763）年造東大寺長官に、翌8年「恵美押勝の乱」では作戦・指揮・編隊に優れた軍略で、仲麻呂軍を策謀に陥しいれ短期間で全てを平らげた。この功により従3位・勲2等・参議中衛大将に任じられ、その後大納言・右大臣、従2位を授けられている。

道鏡は天平神護元（765）年太政大臣禅師に、翌年法王となり宗教界の支配権を握り、西大寺造営計画を推進していたであろう。

真備は法王に任ぜられた道鏡に盟友玄昉の面影を見たのであろう。

真備は、造東大寺長官も務め建設の才能を有していた。おそらく西大寺の建造にも大きな役割を果たしていると思われる。

西大寺の建物の中心は金堂と塔で、金堂は華麗な屋根飾りを付けた薬師金堂と弥勒金堂の2つが前後にならび、薬師金堂の前には東西に塔を、他の寺には無い配置をしていたらしい。

当初八角七重、高さ15丈、径88尺の塔を東西に建立する計画であった。

日本霊異記に藤原永手がこの建築の計画を縮小したため地獄に落ちた話の記載がある。これは東大寺建造で多くの費用がかかった上に西大寺の建築である。財政的問題から藤原氏や官臣の抵抗にあい藤原永手は基壇を八角から四角に、七重から五重に変更して、四角五重塔を建築したのであろう。

しかし、財政的問題もあるが私は地震の少ない中国のレンガ造りの大雁塔や小雁塔とは違い、八角七重の塔を木造で建築する事は当時の技術では極めて困難であったので計画は変更されたと思う。

「続日本紀」は宝亀元年2月には東塔の心礎の石は数千人を要しても遅々として進まず、時には唸り声を発し、据えつけると石の祟りの噂、そこで柴を積み、酒を注いで細かく砕き道に撒くと天皇が病気になった記載がある。

東堂の礎石の破壊から半年後の宝亀元（770）年8月4日、女帝は工事の完成を見ずに53歳で崩御した。

高野山陵に葬られ、道鏡は山陵の辺に庵を設け守り仕え、間もなく下野の薬師寺に流され、2年後

その地で死んだ。

私は道鏡を、後世の人が口にするような、好色な悪人には思えず、己を心より信頼し愛してくれた女帝の死の悲しみに耐える、むしろ純真な男であったと思う。

女帝の死後、続日本紀には道鏡の非道の記載がみられるが、これは天武系の称徳女帝の後を継いだ光仁・桓武天皇は天智系で、中国の史家が現王朝を持ち上げ、前王朝最後の君主を辱めたように実際以上に称徳女帝を、そして法王の道鏡を誹ったのだと思う。

創建時の西大寺

天平宝字8(764)年称徳天皇の御誓願により金銅7尺の四天王像を鋳造し、翌年(765年)西大寺の建立が始められ、造営が完了したのは宝亀11(780)年頃、およそ15年間要したと思われる。

称徳天皇は父聖武天皇の造営した東大寺に劣らぬ西の大寺をとの思いで幾度も造営中の西大寺に御幸されたが、造営の最中に崩御し、その完成した姿を見る事は出来なかった。

平城右京1条3坊から4坊にわたり、広さ31町(約48ヘクタール)広大な寺域に百十数の堂塔伽藍が建立されていたと言う。当時の西大寺の伽藍図は無いが、宝亀11(780)年の「西大寺資財流記帳」に基き元禄11(1698)年に作成された西大寺伽藍絵図を見ると、広大な中心部に薬師金堂と弥勒金堂の2つの金堂が前後に並び、薬師金堂の前には東西に高さ15丈の五重塔が、周辺には金銅四天王像を安置する四王院、十一面堂院・西南角院・東南角院・食堂院等の数多く堂宇が描かれている。これらの堂宇の中に仏菩薩像や画像・経巻が納められていたのであろう。

東大寺の華麗壮大な伽藍造営を押し進めた称徳天皇の崩御、道鏡とその一族の追放により、西大寺造営計画は見直された。

平安期の西大寺

称徳天皇の後を継いだ光仁・桓武天皇は天智系、西大寺の造営には消極的であった。

京都に遷都後、平城京の南都大寺の寺社は平安京に移動することは許されず、その体面を守らねばならない苦難が始まった。中でも創建者の庇護を失い、最も新しい西大寺の苦境は深刻であった、その後西大寺が歴史書に記載されるのは罹災の記録で、まず講堂を焼失、落雷により五重塔の西塔を焼失し、台風により食堂倒壊等々、永祚2(990)年には西大寺一山を焼失し、広大華麗だった伽藍は見る影も無く荒廃し、保延6(1140)年には僅かに四王院・食堂院・東塔の一基・東門が立つのみで他の諸堂は失われ礎石のみの状態であったと言う。

しかし、そのような衰退の中で西大寺は名僧知識を数多く輩出し、宗教活動によって法灯を守り、南都七大寺の一つとして列記されている。

叡尊上人と西大寺復興

西大寺の復興は文暦2(1235)年、叡尊35歳で西大寺の住職となった時から始まる。

四王堂を「最勝王経(サイショウオウキョウ)」の道場とし、西大寺を国家守護の先頭に立つ寺にする事を誓った。

叡尊は興福寺学侶の慶玄(ケイゲン)の子として生まれ、17歳で剃髪、高野山や醍醐寺で真言密教を学んだが真言僧侶の堕落が甚だしいのを知り戒律を厳守する「真言律」を志した。

密教と戒律を兼修する「真言律」の根本道場として荒廃した西大寺の再建に全力を注ぎ、「正法を興し、衆生を利益する」という所謂「興法利生」をスローガンに活発な宗教活動を推進した。

「興法利生」とは「興隆仏法(仏教を盛んにする)利益衆生(民衆を救済する)」の略語で、その活動は、当時遵守されなくなった戒律を重視し釈迦本来の仏教に立ち戻ろうとする戒律復興の活動と、当時非人と呼ばれ社会的に疎外された階層の人々の救済する救貧施療の活動の2点であった。

文殊菩薩は行者の前に貧窮孤独苦悩の人間の姿で現れるという。叡尊と弟子の忍性は文殊の化現である貧窮孤独苦悩の人を社会的に差別され非人の中に見て、非人を文殊に見立てた文殊供養を行なった。

彼等は浄財を集め、飢えに苦しむ非人に腹一杯食わせた。少なくともその1日は文殊菩薩になり満腹を味わせた。

このような弱者救済活動等で叡

尊の名は高まり、帰依する人は年々多くなり、鎌倉幕府にまで聞こえ、また京都の人々にも彼等の崇拝者は多かった。

叡尊はその生涯に菩薩戒を授けた総数は97，710人、啓いた講席は10，721座、行法を修す事41，208座、殺生禁断とした場所1，356所、寺院新建100余、修造590余、西大寺に寄付した末寺1，500余寺と「興正菩薩行実年譜」は記している。この驚異的な活動は90歳に達しても続けられた。

現在も正月に行なわれる西大寺の「大茶盛式」は叡尊が、日本に茶がもたらされ間もない頃の貴重な茶を鎮守八幡宮に献茶し、その供茶の余服を参詣の人々に振舞った事にはじまる。西大寺のお正月のお茶を戴くと1年間無事息災に過ごせるとの信仰を生み、叡尊上人の振舞い茶として御利益にと人々が雲集し小さな茶碗では間に合わず、大きな茶碗一杯に茶を立て回し呑みするようになった。

文永元（1264）年叡尊は諸州の徒僧を西大寺に招集し七日七夜の光明真言土砂加持大法会を開催した。

「光明真言は諸仏の秘蔵を悉く集めて説く法で一度これを聞く人は四重五逆も消滅し、しばしば是を誦すれば往生浄利疑わず・・・」と説き、この真言の加持力により有縁無縁の亡者も悉く往生成仏するという。

光明真言会は西大寺一門結集の場で恒例化され、法会運営費として西大寺に寄進された田地は実に73町に及んだ。

西大寺の再建としては、嘉禎4（1238）年「西大寺資財流記帳」の記録に拠り、八角五重の石塔を建て自ら所持の仏舎利を納めた。寛元3（1245）年真言堂を建立、翌々年僧堂を造営し、愛染明王像を造像、建長元（1249）年僧衆6人仏師9人を嵯峨清涼寺に遣わし釈迦如来像を模刻させ、西大寺四王堂に安置して開眼法要を行なった。

その後宝生護国院、護摩堂、西僧坊等伽藍の造営、造像がされ、荒廃していた西大寺は一新された。

しかし叡尊の再興した西大寺は奈良期創建当時に復したものではなく、叡尊独自による真言律の道場にふさわしい伽藍であった。

鎌倉復興時の西大寺の寺域は、創建時31町あったのが半分ぐらいに狭まっていた。

正応3（1290）年8月90才の叡尊は俄に痢病に罹り、身を起させ大衣を掛け西方に向かい印を結び結跏趺坐し眼を閉じ禅定に入るが如く遷化した。

亀山法王は叡尊の高徳を偲び「興正菩薩」の貴号を、また後伏見天皇も重ねて「興正菩薩」の号を賜った。

その後の西大寺

叡尊の後を継いだ信空上人は後宇多上皇の帰依を得て全国の国分寺を西大寺の末寺にするよう院宣を得て、西大寺一門の名を高らしめた。

しかし、その後幾度か火災にあい、室町時代の文亀2年の兵火で四王院・中門・石塔院・地蔵院・東門を残しては西大寺一山焼失した。

江戸時代の中期に至り、ようやく西大寺諸堂の建築が成され、寛永年間（1624-44）に護摩堂が、延宝2（1674）年に四王堂が、宝暦2（1752）年に本堂が、その十年後の宝暦12（1762）年に京都御所近衛公政所御殿を移築して愛染堂が建てられ、現代を迎えた。

西大寺は江戸時代を通じ唐招提寺や薬師寺と同じ300石の寺領と光明真言会から寄進された田畑73町が財政の基本であった。

慶応3（1867）年王政復古が宣言され明治政府が成立した。明治政府は宗教を厳しく統轄し、仏教の宗派は天台・真言・浄土・浄土真・禅・日蓮・時宗の七宗しか認めなかった。西大寺は空海を高祖、叡尊を宗祖とする真言律宗の本山であったが、独立した宗教としては認められず「真言宗」の所轄下に入った。

その後法隆寺・唐招提寺・薬師寺等と「真言宗」からの分離独立の申請・運動を続け、「真言律宗」として西大寺と74の末寺が独立したのは明治28（1895）年のことであった。

西大寺の現況

(1)四王堂と本尊十一面観音立像

東門を入って真直ぐに進むと右手に四王堂がある。

四王堂は称徳天皇の誓願による金銅の四天王像を祀るために建立され、八角五重の宝塔、称徳天皇

御願の四天王像をはじめ諸仏を安置していたが度重なる火災により焼失。

現在の四王堂は江戸時代（1674年）に再建された四面裳階（モコシ）付き寄棟の本瓦の建物で外観には飾りも少なく簡素な造り。

中央厨子には本尊十一面観音立像を祀り、その左右に四天王像を安置する。

この観音像は鳥羽院が右手に錫杖、左手に華瓶を持つ長谷寺の観音を丈六に模刻し、法勝寺の本尊としていた仏で鎌倉時代亀山上皇が西大寺に遷し、叡尊が修復し安置した。

この十一面観音立像の両脇に安置されている四天王像は文亀2（1502）年の兵火で当初像の大部分を焼失し、増長天の州浜座と邪鬼のみが奈良時代当初のもので、多聞天を除く3体は文亀以後銅製で、多聞天は木製で作成されている。

四王堂の前に放生池があり、そばに「百万古跡の柳」がある。

世阿弥の作の謡曲「百万」は、西大寺の念仏会でわが子を見失い狂女となった百万が遂に嵯峨清涼寺の大念仏会で再会した物語。「百万古跡の柳」は百万が子を見失った所という。当時の西大寺の念仏会の賑わいが思われる。

(2)本堂

室町後期に立てられた西大寺の正門、南門の真直前方に創建当初の五重塔跡がある。その奥に大きな本堂がある。この本堂は江戸時代に南都で建てられた木造建築では最も大きいと言われる。

永延元（987）年奝然（チョウネン）が北宋からインド伝来といわれる古様の釈迦如来像を持ち帰った。いわゆる三国伝来の京都嵯峨清涼寺（セイリョウジ）の栴檀釈迦如来像である。

鎌倉時代になると「純粋な仏教に帰れ」という南都教学の復興運動が起き、三国伝来という正しい姿の釈迦如来像が拝まれ清涼寺式釈迦如来像が作成された。

叡尊は仏師禅慶（ゼンケイ）等9人の仏師に栴檀釈迦如来像を忠実に模刻させた。造像した釈迦如来像を四王堂に安置したと釈迦像内納入文書に造立経緯が詳しく記してある。この像が現在西大寺本堂の本尊として安置されている。数ある清涼寺式釈迦如来像の中で西大寺の像は白眉といえる。

西大寺本堂の内部は7間・5間の広々とした板敷、外周りには1間の外陣をめぐらす。内陣の天井は細かな格子を配している。内陣の中央後方に本尊釈迦如来立像を安置し、左右に入れ込み式の脇壇を設けている。向かって右に弥勒菩薩坐像、左に文殊菩薩騎獅坐像および4脇侍像を安置する。

文殊菩薩騎獅坐像は右手に宝刀、左手には経巻を載せ獅子の背中の蓮華座上に結跏趺坐して騎乗する。文殊菩薩は高く髷を結い冠を被り、肉身は金泥を施し、衣は華麗に彩色し、口元は紅を帯び神々しい姿である。

文殊菩薩は獅子の背中に騎乗していて前方左右に善財童子・優填王（ウデンオウ）、後方左右に仏陀波利（ハリ）三蔵と大聖（ダイショウ）仙人を随えている。

鎌倉時代、叡尊や忍性の文殊信仰により文殊五尊像が作成された。

この像の像内文書によると叡尊没後3年の永仁元（1293）年に発願され13回忌に完成したとある。

(3)東塔跡

本堂の前に東塔跡がある。文亀の兵火で五重塔の東塔は焼失し、四角の基壇に縦横4列の巨大な礎石が並ぶ。

昭和31年四角の基壇の周囲を発掘調査したところ八角の基壇址が確認され、当初八角七重塔の計画が四角五重に変更された事が証明された。現在は八角の基壇跡は敷石で囲み四角五重塔との基壇の大きさが一目で見られる。

八角七重塔の敷石を観ていると、建てられる事は無かったが当時の西大寺の隆盛が偲ばれる。

(4)愛染堂の秘仏愛染明王坐像と興正菩薩叡尊坐像

東塔跡の西側には愛染堂がある。愛染堂は宝暦12（1762）年に京都御所近衛公政所御殿を移築して建てられた事は前述した。

入母屋造りで正面の柱間は不規則な5間。正面内部は折上格（オリアゲゴウ）天井をもつ。

広い内陣の床は板敷きで中央須弥壇上に叡尊の持仏の愛染明王坐像を納める厨子を置く。愛染明王坐像は秘仏で拝観できないが、厨子の前に愛染明王坐像そっくりに作られた前立仏が安置されている。

３１㎝の前立仏の愛染明王は宝瓶の上に赤色蓮華坐に坐り三面六臂で眼は怒り、頭髪は焔のように逆立て、獅子冠を載せ、獅子頭には五鈷鈎（ゴココウ　煩悩を打破する５の鍵のある仏具）を置き、身や蓮華坐は焔の紅蓮に彩色されている。

平成３年、上野の東京国立博物館で開催された「奈良西大寺展」で私は秘仏の愛染明王像の本物を拝観した。日輪光を背に宝瓶・蓮華座の上に焔髪を逆立て三面六臂の手には鈷鈎・弓・蓮華等の武器を持ち、総身真紅にした憤怒の像容、長年秘仏としているだけに真紅の色がその怒りを一層引き立たせた美しさに見とれたものだった。

弘安４（１２８１）年蒙古軍が再来、亀山上皇の院宣をうけた叡尊は石清水八幡宮で七日間昼夜不断の祈祷を行なった。叡尊の祈祷が終った時叡尊の所持していた愛染明王像の鏑矢（カブラヤ）が閃光と轟音を発して西へ目指し飛行し、モンゴル軍を滅ぼしたと言い伝えられている

江戸時代、愛染明王坐像が江戸回向院で出開帳された時、モンゴル軍来襲の折の愛染明王像と叡尊の奮闘のドラマ、歌舞伎１８番「矢の根」が中村座で２代目団十郎が演じて熱狂的な歓迎を受けた。

また愛染堂には興正菩薩叡尊坐像が脇壇に祀られている。

内衣の襟を正し簡易な袈裟を掛け、背筋を伸ばし結跏する、長く垂れた眉毛、窪んだ小さな眼孔に両眼の下にたわむ皺、低い鼻に結んだ口元は晩年の叡尊の高潔な人格を表している。鎌倉後期を代表する肖像彫刻であろう。

この像は叡尊８０歳の寿像で彼の数千人弟子達の願いで仏師善春（ゼンシュン）が作成した事が納入文書に記されている。

おわりに

鎌倉時代といえば「鎌倉新仏教」が盛んで奈良・京都の旧仏教はなんら活動をしていないように思われがちです。

しかし西大寺の叡尊・忍性は文殊供養等の民衆救済活動を積極的に行い民衆の支持を得た。

ここでは叡尊の高弟忍性の活動に少し触れて置こう。

忍性は西大寺で律宗の復興に尽くし、橋を架け病人貧者を救済した行基菩薩の再来といわれた叡尊の高弟で、奈良から関東に下向し極楽寺を拠点として鎌倉を中心に活動した。

忍性は戒律を厳重に護持し、一方病人非人等の民衆救済活動を積極的に行い、最も穢れた存在であったハンセン氏病患者等の救済活動を行い、生身の菩薩として尊敬をあつめた。

これらの慈善救済事業と戒律護持の態度により、北条泰時の弟重時・得宗時頼・金沢実時等鎌倉幕府の首脳陣の尊敬を集めた。

忍性の推薦により師叡尊が鎌倉幕府の招きにより鎌倉を訪れ６ヵ月ほど滞在した。これが一大画期として関西は西大寺、関東は極楽寺を中心に鎌倉幕府の後援を受けた。

現在の極楽寺は往時の繁栄を偲ばせるものは無く、百日紅の咲く小さな古寺であるが、鎌倉時代後期は鎌倉幕府、特に北条氏の保護を得て、建長寺と並ぶ大繁栄で、単に宗教面ならず都市鎌倉の政治・経済・文化の面で大きな影響力を有した。

忍性により病人・非人の救済活動のほか、木工・石工等技術者集団を把握し「極楽寺の切通し」を開削し、道路・橋の修築や幕府に替わり和賀江島の修築・維持を行なった。

極楽寺は現在の稲村ガ崎小学校の敷地に方丈等の中心部を置き、難病に苦しむ人々の治療施設や周りの谷々には多数の極楽寺の末寺が、そして鎌倉側の地域には極楽寺に救済され組織された非人や職人が住み、極楽寺門前は多くの町屋が並び一大門前町を形成していた。

南北朝時代に描かれた忍性菩薩像は頭頂部が尖り、鼻は大きく赤く描かれ、人に親しまれた忍性の人柄がよく表れている。

西大寺の境内には人影は少ない、東塔跡を前にして、建つ事の無かった「幻の八角七重塔」を思い描いて私はたたずんでいた。

Ｈ３０年６月　記

淡交社　「古寺巡礼奈良　西大寺」
梅原　猛　松本実道
淡交社　古寺巡礼奈良４　西大寺
西大寺の歴史（聖武天皇が娘阿倍内親王に懸けた夢）　高野　澄
西大寺の法燈　佐伯俊源
興正菩薩叡尊７００年遠忌記念

「奈良西大寺展」
西大寺・東京国立博物館
小学館　原色日本の美術9
「中世寺院と鎌倉彫刻」
中央公論社　日本の歴史3
「奈良の都」　青木和夫
講談社学術文庫　「続日本紀（上・中・下）」　全現代語訳」
宇治谷　孟
吉川弘文館　「奈良朝の政変と道鏡（敗者の日本史）」
瀧浪貞子
新人物往来社
「古代女帝のすべて」
武光　誠　編
「私の鎌倉（歴史編）」
粟　光行
を参考にしました

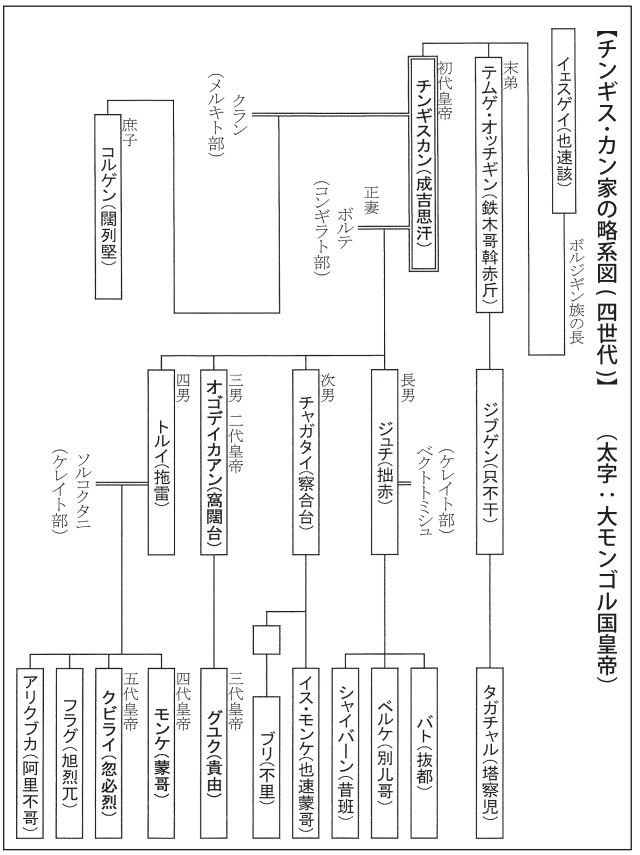
会員研究

血塗られたモンゴル帝国史

真野　信治

はじめに

十二世紀北中央アジアに突如として出現し、瞬く間にユーラシア大陸をせっかんしたモンゴル帝国。チンギス・カン（成吉思汗）という不世出の英雄がほぼ一代にて成し遂げ、作り上げた帝国である。チンギスはもとの名をテムジンといい、モンゴル高原に盤踞する遊牧民族の中で、あまりぱっとしないモンゴル部の中のキャト氏の中のボルジギン族の長イェスゲイ・バートルの子に生まれた。しかし、彼は天才的な戦略家であり、斬新な軍政を編み出し、非常に統制のとれた戦をする指導者であった。そして、同族のタイチュウト部を皮切りにメルキト族、タタル族、ケレイト王国などを次々と制圧し、一二〇六年ついにモンゴル高原遊牧民族の王として即位し、チンギス・カンと呼ばれるようになったのは周知のことである。その後、チンギス・カンは東の金帝国討伐、西のホラズム・シャー王国、南の西夏国を滅ぼし、徐々に領土を拡大していった。そして、彼の逝去時には東西に渡る広大な地域が遺領として次世代に残されていた。その後、二代目のオゴデイ、およびそれ以後も領土拡大作戦を止めることなく、十三世紀末までにはユーラシア大陸の東西に及ぶ、世界史上で最も広大な領土を持つ帝国となった。かれらはこの国家を「大モンゴル国」（イェケ・モンゴル・ウルス）と呼び、チンギス・カンの血族を「アルタン・ウルク」（黄金の一族）と呼ぶ。本稿は、チンギス・カン以降、あまり知られていない「血塗られた」政権交替劇のドラマを検証してみようと思う。登場人物が多いので、系図にして一覧できるよう施した。



一、末子トルイの暗殺疑惑

チンギス・カンには正妻ボルテから生まれた四人の子、長男ジュチ、次男チャガタイ、三男オゴデイ、四男トルイがいる。別に、チンギス晩年に寵愛したクラン妃から生まれたコルゲンがいるが、そ